ボランティアに参加　---石巻から女川---

３月終わりにHIS観光が募集したボランティア活動（次のURLを参照）に参加しました。
http://www.his-j.com/kokunai/kanto/volunteer/
活動はNPO法人オンザロードの活動のお手伝いです。
私は震災前、仕事で石巻や女川によく行っていました。現在、その女川に行こうと思ってもJR女川線は被災により開通していません。そのような石巻や女川が今どのようになっているかも知りたくてボランティアに参加しました。
行程は金曜日の夜に新宿からバスで出発し、翌土曜日の朝、塩釜に到着。朝食後、津波被災により廃校となった石巻湊第二小学校の花壇の花植えやグランドのごみ拾い等をしました。
翌日は女川に行き、廃墟と化した女川の街を見、当地で自らボランティア活動に立ち上がった若者から被災時の話を聞き、その後女川でカマボコを作っている「高政」の専務から被災状況や同社が行った救援活動や復興支援活動の話を聞きました。その後、石巻の商店街に行き、復興のお手伝いとなるのかどうか分りませんが、買い物をし、バスで帰ってくるというものでした。

一年も経っていますので、被災地の状況は当時の状況どおりでは無いでしょうが、それでも瓦礫や廃車の集積所がバスから諸所に見られました。現地で話を聞いてわかったのは、海岸が浜辺を形成しているのか、入江をつくっているのか等により押し寄せた津波の様相は様々のようです。石巻は平坦な海岸が続いているため１ｋｍ以上の内陸部まで津波が押し寄せ、障壁となる建物を破壊しました。一方、その西２０ｋｍにある松島は入り江ですが、入江の中にある島が防壁となったのか、津波は押し寄せませんでした。しかしながら東１０ｋｍにある女川は同じような入江ですが、島が無いため標高２０ｍの高台にある女川町立病院の１階天井部分まで津波が押し寄せました。

以下は、それぞれの地における所感です。
石巻の震災当日の津波の状況は次のURLを見て下さい。
http://www.youtube.com/watch?v=RLgP3nmpaRc
http://www.youtube.com/watch?v=ZqcUg3ewycY
石巻には旧北上川が流れているのですが、ボランティア活動をする予定の小学校はその東にあります。そこに行くために海岸から４００ｍのところを通る女川道をバスは通過したのですが、道路沿いにはガレキや廃車

瓦礫の山

廃車の山

の山があちこちに築かれています。しかも倉庫や家の１階部分は皆被災しています。一年も経っているのに未だ復興が進んでいません。

１階部分を被災した倉庫群

９時過ぎに、ボランティア活動のメインである石巻の湊第二小学校に到着しました。この小学校は海から７００ｍくらいの内陸部にあるにも係らず、津波が一階の天井部分まで押し寄せました。当日は小学３年生までは授業を終え、帰宅していました。このため亡くなった児童は帰宅した児童の中の３名だけだったそうです。４年生以上は授業中でしたが、津波のために近所の避難者を含め児童と先生が２日間、三階建て校舎の２階と３階に避難しました。その間、海水はひかなかったそうです。夜は寒く窓のカーテンを外し、身体にかけて暖にしたとのことですが小学生の身では大変だったろうと思います。学校は三角屋根を付けていたため屋上が無く、自衛隊もヘリコプターで救出活動や食料等の搬入ができなかったため、ボートを使った自衛隊が乾パンを配ってくれたとのことです。教頭先生が話して下さいましたが、その話の中で「この被災を経験した子供達の中からきっと将来有為な人材が生まれるはずです」という確信的な言葉が印象的でした。それだけ惨めで悲しかったのでしょうが、皆で勇気を振り絞りながら協調心を喚起しながら忍耐をしたのであろうと思われます。

１階をベニヤで覆った湊第二小学校

ベニヤに描かれた絵

お手伝いしたボランティア活動の具体的な中味は次のとおりでした。

学校の一階部分は窓やドアが破損しているのですが、今回の津波で廃校となりましたので補修されていません。このため不審者等が入らないようベニヤ板を打ちつけてあるのですが、それでは余りにも粗雑ですので、そのベニヤに子供達と一緒に絵を描きました。二つ目はPTAの方と一緒になって花壇に花を植えました。三つ目は、グランドに散乱しているゴミの片付けです。グランドには網の切れ端等の漁具や子供達が遊んだであろうソフトボールや木材の木っ端が一杯あり、ぬかるんで居るグランドからこれらを拾い集めました。

ゴミの散乱するグランド

学校の前の住宅の一階には主の無いピアノが寂しそうに放置されていましたので、写真を撮ってきました。

次の日は女川でした。女川はもっと悲惨でした。津波の様子は次の URL を見てください。

http://www.youtube.com/watch?v=L4pHFpcpCNA

http://311earthquake.blogspot.jp/2011/05/2011311-httpwww.html

この映像を映している町立病院は町の後背地にあり標高は約２０ｍです。この１階部分の天井部分まで津波が来たそうで、津波の高さは２２ｍ弱もあります。この街には１９６０年のチリ津波も押し寄せました。下の URL をクリックして下さい。海岸から約３００ｍの女川駅の階段（標高５ｍ）にまで津波は押し寄せ、その表示を残していました。

https://tabidachi.ana.co.jp/card/1518323

しかしながら今回はチリ津波どころでは無かったのです。

映像にあったように高台に避難した人は町立病院の駐車場の柵につかまりながら津波を見ていたそうです。映像にはカットされていますが、その見ていた人が引き波で海にさらわれてしまったそうです。地震前の人口が１万とちょっと。その１割が今般の津波で死者や行方不明になりました。現在は９０００名の人口の内、３０００名が他地区に避難していて、現在の人口は約６０００人だそうです。

津波から１年経ち、がれきの街が片付けられたために、コンクリート製のビルディングも残っているのは数棟しか有りません。目立つのはマリンパルおながわです。外側は無事ですが、中は全部浸水し、破壊されているので今後相当の修復が必要です。

横倒しになったビル

残っているビルも根っこの支柱が抜けたビル、道路まで流されたビル、横倒しになってしまったビル。これらは全て津波の研究用に残すとのことです。まるで廃墟です。産業も無く、街もなくなり、今後どのように復興するのか愕然とするばかりです。

その中で女川の若者が女川福幸丸というボランティア団体を立ち上げています。次の文章は女川町立病院の理学療法士であり、このボランティア団体のキャプティン（リーダー）である若い女性が昨年野外音楽フェスティバルを主催した際の言葉です。「震災発生から１か月以上、職場に泊まり込みお互いに助け合いながら必死で生きていましたが、心身ともに疲弊しきっていました。その時、久しぶりにラジオから流れてくる音楽を耳にし、涙が流れるほど心が癒されたことを強く覚えています。『no music no life』過酷な状況に立たされて初めて、この言葉の重みを知り、音楽には底知れぬ力があるいうことを実感しました。また音楽は世代を超えて心をひとつにしてくれます。音楽を通して絆も生まれてくるでしょう。そこで、今頑張っている全ての人に元気と勇気を与えるべく、女川の若者達による女川町民のための野外音楽フェスティバルを開催したいと考えました。町にはいまだに処理しきれないほどの瓦礫が山のように積まれています。はたから見ればそれはただのゴミにしか見えないかもしれません。しかし女川町で生まれ育った私達にとっては、それがここで暮らしてきたひとりひとりの生きてきた証に思えてならないのです。瓦礫ではなく“我歴”…復興を目指し、この女川の地に新たな“我歴”を刻んでいきたい…そんな願いを込めて“GAREKI”という言葉をイベント名に入れました。」

女川福幸丸リーダーと女川の復興を志す高校２年生

至る所にガレキを集積

全文は次を参照して下さい。

http://www.onagawa-fkm.com/html-file/ofm.html

この女川福幸丸に参加している高校２年生の男の子が次のような話をしてくれました。

彼は当日、石巻の学校に居たそうです。石巻は先ほども説明したように建物の１階部分が浸水する状況だったので、女川も同様ではないかと思いながら、歩いて女川に帰ってき

たそうです。自宅に行ったところ、自宅が流されてしまっていて無い。避難所に行って避難している人の名簿を見ても家族の名前が無い。そうこうしている内に家族を捜していた父親と遭遇したそうです。彼はもうすぐ高校を卒業しますが、地元では就職口が有りません。しかし父親と離れて遠くには行きたくなく、悩んでいるそうです。彼は言います。「僕は女川の復興に貢献したい。」「人は前向きに生きていくべきだ。後ろにそっくり返ったら怪我をする。しかし前向きに歩きながらこけたとしても手を付けば、怪我はしない。だから女川の復興に貢献するためにも女川で就職したい。」

すごいですね。彼の話が終ってから、横に居た先輩が言いました。「彼はおじいちゃん、おばあちゃん、両親、お姉ちゃん二人の７人家族だったのです。しかし津波で一挙に５人が亡くなり、生き残ったのは仙台で働いていた父親と本人だけです。」この話と同時に彼はうつむいてしまいました。家族を思い出したのでしょうか。またこのボランティアのリーダーの女性に震災前と震災後とでは貴方にとって何が変わりましたかとの質問に、彼女は「今までは自分の事しか考えて居ませんでした。しかし震災後は他人のことを考えるようになりました。」と答えました。

押寄せ引いた津波で曲がった看板

その後、女川のカマボコ製造業の「蒲鉾本舗高政」に行きました。工場は女川の高台の裏手にあり、万石浦という潟の東端にありますが、津波の被害は無かったそうです。ここは現在三代目が社長で、四代目となる息子は専務で、３６歳です。

蒲鉾本舗高政専務

この方が当日の被災状況、会社が実施した被災者支援及びそれに引き続く復興支援活動を約１時間に亘り、感動的に話して下さいました。お父さんの社長は昨年「ガイヤの夜明け（テレビ番組）」に出演されたので、その時の話を聞かれた人もいらっしゃるかと思います。

次は youtube 等で取り上げられている専務の話です。

http://www.youtube.com/watch?v=2lNshcjjuhI

http://www.soaptvextra.co.uk/video/youtube/id/j37_E6EzndE

社長や専務の自宅は２階まで浸水し、先代社長だった祖父が津波で亡くなりました。しかしながら会社は津波の被害を受けなかったそうです。

この工場が被災者支援を行うのですが、そこには偶然もありました。それは震災前夜の３月１０日に高政の冷凍庫にはかまぼこの原材料が入荷したばかりだったそうです。またタンクには１００トンの水が貯蔵されていたそうです。そこで社長と専務は地元企業としてできるだけ被災者の役に立つよう努力しようと立ち上がりました。

倒れて道路まで流されたビル

まず町には物資が届かず、町民は食べるものすらない状況が続きます。しかし、親子と社員は歩いてかまぼこと貯水していた水を配ります。しばらくすると物資が届くようになりますが、菓子パンのような甘いものしか届かなかったそうです。そこで「あったかくて、しょっぱいものが食いてぇ」という地元の人の要望に応え、製造ラインを応急処置で直し、東北電力を通じて中部電力から電源車の支援を受けます。そして地震から９日後には、熱々のかまぼこ１０万枚を無償で町民に配ったのです。

何も無い商店街跡

しかもその後、銀行に借金をして新工場を造り、あたらしい雇用を生むようにします。震災前に１２６名だった従業員を１７８名にまで増やし、この３月までにさらに新入社員を１０人以上増やしたそうです。１人を雇用すれば、４人を食わせることができるので、町民の概ね一割の生活を高政の雇用で賄おうとの考えたそうです。

錆びたレールを駅に座り込んで見続ける地元の人（？）

そして今や、取り組みは自社の事業だけに留まらず、冷蔵庫を被災した他企業に使わせ、旧工場も無償で貸し、しかも女川町の産品を販売するサイトを運営しているそうです。しかも町内産食品の放射能検査をすべて無料で受け付ける等の復興の先導役になっているとのことです。

経営者と若い息子が地元の復興のため、多大な借金までして地域社会のために尽くしている姿に感動するとともに、企業が社会のために果たすべき役割について、深く考えさせられました。

以上が今回のボランティア活動でした。ボランティアとは名ばかりで、小学校の美化作業をお手伝いしただけですが、復興期のボランティアはこういのもありかなと思うものでした。何故なら地元のニーズは緊急性の無い復興のお手伝いをすることです。官が行う公助のお手伝いにあまり手出しをすると民需を圧迫することになり、問題が出ます。となるとこの時期のボランティア活動は被災地で物を購入することによりお金を地元に還元したり、被災地の人の話を聞いて被災者を慰撫することではないかと思った次第です。

山積みされている廃車

さて今回のボランティアの参加者は４２名で、６０歳代が１名（私)、５０歳代が１名、３０歳代が５～６名位、後は全て２０歳代です。中には小学校三年生のお嬢さんを連れたお母さんや沖縄の男性大学生３名も居ました。男性はわずか１１名で、他は女性でした。いかに最近の若い女性がパワフルかがわかります。今後はこのような女性が中心となって日本を改革していくのでしょうか？

榎本 眞己(2012/03)